集義外書

削簡二　二

地

ロイ13
2760
8-2

早稲田大學圖書館
寄託者 内田文庫
寄託書第一五０號
7
第20號
第2冊

文泉堂

集義外書巻三

削簡三

一 来書略。貴老ハ天下の先儒と申侍る。佛法を退き給ふ言を
きゝといふ人数多くはや〻もすれば仏者ことにあり侮して今の
佛者ハ無人也とし。書述ありてたとひとも。しかも無道の罪を
ありて存非

返書略。今時儒学を好む者ハ。佛をそしり法をいひて役とし。志
なれとも仏者ハ一點もいさまと。一歩をも退かしとは。我書経
て明辨をしめ給ふても。儒者も起るへからし。仏者も退くへき
しくはへて。筆紙の労無用のかなしくはり。拙者も同志の友
なきよりて。其人此まとひを解へきかよハ。仏法乃非を
もしは。人川くふかハあるとは、へとも。其人よあらさ視え

2760

されバ仏者にハ人多く。儒者ハ名のミありしハ何程か
ありしやそく少しも志あるもの少くバ却て仏者の
威を恐れべし。儒者に好人あまた出来く仏者ハ作法なく
ハあるまじと。大陽出て残星光なきがごとく成べし。今儒
者ハかくのごとく微かなれバ。仏者の威勢にくらぶれバ天と
地ども。其名ハへたりしハ恐れもとなりし後くハ今世までに
も論くハへて後世州の沙汰とハいうことを信ずるが
なるべし。秦の始皇儒をにくミ我悪政を後世にいひつた
へんことを恥ぢ。天下の儒者学者悉く穴に埋めて。
うらころし書をさうし焚くやきしかとも其悪名をく
まぬかれ。儒も仏を徳なくて。人力を以て敵とするハあしくバ。
武備の云。今の仏者ハ盗賊なり。仏法ハ其の亡ぶ盗賊の仏

法の名を借りて大きに奢りをきはめ。かろしめども釈迦達磨
を出して仏法を起しなバ。寺も千が一つになり僧も万が一
になるべし。出家ハ樹下石上をなして世俗のことを不知
ものなりと云へば。渡世の事ハ何ぞ人道にあら
ざるや。仏法もなりはひあるべし。其仏法とも起
し儒者も知らバ。物の理にかかはらず相害を報ず可有
くバ仏を実すれ。儒も其かくれば互にはげまし合ふ
事なり。然レバ其世ハ三教一致の格にはへども別なる
ものなくバ。別にそへ。仏へも仏法を退くるハよくしくバ。
守らひ仏者を道にて退けるべきものなり。人多き時ハ
天下の儒の学びあるべし。其上明君の仁政なしハ。賊も同じ
人なりと名付くによりて後世の…かくならぬもの

なれバ。おのれひとりよくともならざれバ。赤子の井に入事ハ
赤子の罪にあらず。傍にて下に居者ハ何ぞあハれむべきや。程子
弟子ハ天吏なり。吾人にして默して已とすべきのことなり

一 素書略。我おもふ出合にハ。内にハ儒者と云ことのあり。町人にして
学問する者あり。農を務て学ぶ人のあり。何ぞと見るべき
云と何とて不相付にや。我おもひ神しく。受用すべき人
とハ。何とて受用なきある人き事にしてはや
返書略。各の学ひしとて。事乃書も是から。はし書も。同し書に
て。左理も同しく左理にてハ。学術の私心とすると我をのとなし
乃ちにひとりす千里のおやまりを出来ハ。微ハまれり幼少より
学ぶ。よく育く文学し。是用なく。博学者と成行ん事に。扁
ひさんを知れく。百姓とあらんも。田地なく。武士とあらんも。知

よく家に生れたりとも。幸に文学の業をこころざすとも。ひとひ
さらずとも。物積をゆるく。まつ云下仕いぶ。我ハ物によりて分とちて
家人の用を達し。内にハ鶏に理を窮め。性を尽し。家内
と和睦し。朋友に交て信あり。礼譲あらん事を務むへし。
甚言にいたらん。又ハ君子の徳。大夫士の任し。治るべきの道。
庶人ハ其業を務て。能あまかく悪くすも。すべからず。我も
又其に同し。悪をよくハ可也とし。其間ハ譲れり。凡人のこころ
分れもち。富あるへハ人と皆我とへし。君を任をいふて。恐るも
道なり。並あらん。又町人の家に生れて。家業ある人ハ学を
好みにいりて。身ハ町人。心ハ風俗もて。徒町人といふものに成て
学ハ鶏に己か為に。人の用をたくましうす。大利をこう
まで。有べきからの利をとりて。家職に精をおし。いふ

居されバ商の事のあきなひとどうりをせずと。諸人に理直なると信
ぜらるゝハ。賤しとするに足らず。人乃ゆるせる利ありて財の有
餘なる者ハ可なり。百姓の家に生れて田地ある者ハ又た
故ありて農より引越ても。農人の業に力を尽くすこと
ハ堯舜(キヤウシユン)の民なるおもひをなし。逍遥(セウヨウ)して田に入畠
に耘(クサギ)り。足を去り鉏(スキ)の柄によりかゝりて立ても居ても心
乃いさぎよくして。万物の生ずるのひやうれなきのひハ天
地神明をも感ずべきこと。況人にをいてをや。此の以て
し肴肥る馬の事のみ人多くつまづく道しき禄にて
子孫ハ児女のあられを好とも。其心根ハ妻妾におなじ
ことなるべし。やしむべくもなかやしむべからず。市井の俗と
云ふ賤きことのよきはつとハつも公乃利害事のなきあるべく。

仁義なけれバ。たとひ身ハ市井にして。心ハ賢なる丈夫とおなじか
るべき人なり。ハ居士とも隠者ともいふべし。昔より賢者のかくれ
所ハ農商なり。何ぞ其職を恥べきや。門の思ひをなす抱き。
梢をうちてふるくれ住べし。況わんや医師の業をや。今乃
人の学によりそのハあつるれ。儒者と云ものハ実ハ産業に
してかハ居者の様よりひなせり。まさに清かるべき内ハいやし
く道理らく教べき身ハ奢なれバ。荒みたるとハ名利なり。
言行の有りふれしなれり。又産業をすてゝ学ハ好み儒
ものハ生れつきの文才に器用にして文字しれども身との
盛べし。速祈なる鞠することいふなし。又ハ町人の賤き
職といふ学問してよりれも夫に更に身をそこなふべきことな
らんに。このむ事あり。是市井の利心ハかくてくることりてう

こゝろも農によりて学ぶものもこれに同じ。賢者ハいつとて
もなくしてかゝはべき庶人などより合ふてこそ学ぶなれどい
よし卑下して己が身にあらへき学ぶによりて其位に
よわるねうと去りつ。庶人にして武士のまなぶ所を作
との八行と志しく志あれば德に入るべしや。道ハ備ぬ所
なくても志更に道に志ある者ハこれに異なり。釈迦ハ王
乃子に生れさせ給ひ。学問修行のさかりには人間第一乃位をし
き者れ人にあたらうはで。天合よあり。天下の器となりて。
よてうんと欲せるの儒仏儒仏乃教を滅し才ハ人の下
に居く仏ハ万物の上にのひしとも。国ことに諸儒の了すか
らとや日本の出家ハ人の上に居たる所なし第一乃波
足として学ハ人にならひてなすことこそ学ぶもの乃人乃

父たるもの学ハいとして子たるもの師たるすと
学ひとして弟子たる事を学ぶに人ハ子たるものゝ
人の父となるよ人の弟子たるものハ人の師と
成こりうひつくゐらふにあらそ人にわたりて学ぶ。
今の学者ハ農に居て農を安じ商にありて商の身
をもちゆ。僭して武士のまなふ所し遊民の徒となりむ
と欲として此よろしと貪りて才を流乃美とせ
らと竊して隠微の說にして仏をとく示の化信をもち。
奢りおる道を学を一旦その書にそふり滿仏ある
高ふして言語ならぬるのとなりゆくか学ぶ所に
なしと作

一　本書曰。武道その内に小者力。中者力。長者力あり。寸法

十文字乃紀纏。長刀あり。こゝ利の争ひまちまちに作。い
つまゝよくいや
返書略いつまもよくいゝてこゝ有れ得ことの深すわくいは銭得
さりとて。世の皆我よ同しくたゞてさゞふ六。独丈れせしきき
知りそいは。あねよる人いよりしわしとゝら川をれ。人て乃包
次第に。紀後しるゝゝよくいは上下我分して。自由我分して。利の
とゝやゝなかゝとのハ小太刀なり。短とよくしらく
賊を切るハ中太刀なり。大いまゝゝ小働くハ長太刀なり。且
夜討なとの仕者なすとを。ぞうりふもほとん
小脇指なり。大脇指いうつきよ利あり。中脇指いかゝし
おりそよ利あり。ぞうまた人々のおもひいへと。鎗の子より
よ給ふ。あり。是ハ大纏よいは。一様よ定しべうしれ。名皆立

村ゝいく我よハ。すべ纏の長さゟよりし。但大いきの纏あり。紅
軍機乃用にはくい。かけひきの利とても得。太刀長刀にかはりて。
往来れまきとゞかし。自由なることの。ハ十文字なり。入身よ
きことのハ長刀乃紀纏なり。公世上よれ名を取るる人々
よハ。木下淡別か。蔵羽別。緒方乃兵部。中坂口ハくゞ東つ是ぞ。
ん皆二の刀のよれすべ纏と用ひらる人より。所ふよりて利あ
達ハ。何をよりしとを。おしく定世へゝれ。名刀れ内より。ハ皆
ありさるそよくいは。知りて世中の一百るすべ附を第一とし。名
目かゝすもあり。示すと第一とゝて。名をとるすもあり。附のそ
やゝわよ包と奪まてく。我なれよ紀を失ふ。夫もあり。今
附近ゞ男ハ。胸ゟるい小蒜とし。京女ハ帯と尻よかまくと
ふなり。是なれ。ハ男そ。はそとのハ。恰好よ合て。胴縫うかわ

足の長かりけるかむの男は生れ付となり。女は恰好よハ胴
の短かめに足の短かめなるかむは女の生れ付となり。この
ゆへに胴長の長き男か。生れ付には胴長のんしろき男
を似せて常ともとめれど。とかくには生まれつきもなく。当世
と知らぬ生れ付には胴あいみじき男もとくとれど。
常に○にある事なり。生れ付よき男の恵まれ腰に常として
ならぞ。力はぬけもよからず。又生れ付胴あい長かるく。恰好よ
き女を似せて胴あいみじかるは女が。常ともとけくとれハ。常
のにはまハ目に立く。左りにさけるかにれど知らく。生れ
付よき女をもとけくとれど常左りにくはさかりるとて胴
あいながるとくわてくやりの事にさへ。稚才ともあるる者ハ
まれなり。或はゑの目に極ふも。を知りてこれなし

一 来書曰。出家と息婦とハ戸に入ども。人乃かてしとする。飲
食男女乃欲をまぬかるるハ。又奇特なり。其潔き事
からハ。俗といやしく見ておとしめるもことわりと思はれ
返書曰。出家なりても。世の者に生れ付て。飲食に色
き事のあり。男女情欲をもちて。有子れども然かの道
あるハみな色にて。畜類も色あり。蝶ハ世に樹頭に露を
飲てこれあり。飲食の清潔なることこれに過さ数多の者
らし。似我蜂も子代生れ。他の虫の子をとりて己の
子とし。出家ハ弟子とて子を取かくし。俗人ニても何の
心もなく。妻子をもちひなる者あり。大名なとの奥
女も自由ならぬ。男女ともにまた子孫なき者あり。世の
人さへ家ある人は。夫して出家へもかはれ得ることのなるてから

まことハ珍しからず。寿持といへども。蝶のごとく。似我のごとし。幼少
のときよりれ出家か。或ハ浮世のならひに疎するハ。隠ごく葷
肉女色あり。法を立ることいふものも男色あり。邪なる男
色をも。ゆるしがたきにハあらず。出家ハ不淫の法なれバ
生れ付欲うすきものにて男色もなく酒色を絶るもの
あり。出家の身なれバ。なるほど是れとも気化にて生じ。穿を服ぞ
なり。小虫にハ及ぶべからず。少しき生れつきにて自満して大なる
なりもせざるものなり。飲食男女の欲なきものハ蜉蝣よ
しくハなし。なれども羽虫の長となりて。雌雄正しき鳳
凰を長とす

一 兵書略。今の世の中。軍法者流多きなれバめづらしからぬ
事なれバ。何事ぞあるハ。戦ややもすれバ。合戦多く
負べきとなれバ

返書略。世中安泰なるゆへに。軍法者多くハ。軍国に戦ひ
れし。今の軍法者。百人が九十人余ハ。名をも志れず陣もくば。
大方法ハ志らひとしても志らざれバ。軍法ハ安すきなれハ志れ
ひもなけれバ。そのひぢらまバ。勝負の利と。大将の思量と
ハ。軍法の外なるものにバ。大将の思ある人が。又ハ勝負の利
よき人にあらば。軍法を出されたるなし。大負をとる事べくバ。
百に一二も流のよきものの家伝にバ。古流のよき人格をと
いりぞうらにて戒するもなくてバ。大方と以て尤常なり
ひとつひ満との附ハ。血気衰し。眼くらくてバゆへに。害か
なかに備るにバ。古の流よくバ。大よそかり
きうる事べバ。昔の名かハ。兵法ハおそれそも。利あるべくバ義

經説の命をうけ。神道淫盗なる云人よりこゝろを説つけ。
我知ねとも。人ハ人とも思ひくいかなしふかすかくおかされハ不
よ。人として知る事眼くらミ。おもひのかくとにまよふく滅ハ。
義經ハとそれく勇なりけれ。その名そむかれはかりなる。
所をもちる人のへきて。そのまとなる武勇の味をおもへん説は
よりくハ。天狗よ兵法をならひしとおもひハ術にハ。当分を知き
て。平家の緒を省くところ。ひくの徳をもとらへ説しを。
まことらみく。天狗のつきならむとするよしにハ。鍛錬ハ
けいこせされとも。生れ付く器量かくことくミをなく。当分月
ゆへのかく。空よりふる雨かことく。地より湧かことく。当分ん
やれなる人あるするにハ。もとよりて勇氣をとなれハ。ひとりきり合の
ことにハ。兵数の名をあきおさめるのよくハ。則義經も人ときて

ゆへに義經ハ大将の器にあり。さりなから術負の利なり
器用なりしを上文学にて。七書をよみをしへゆへに。大将と成
ぬへり。このほか勇氣のあるとさまで。かゝるゝ人なり
一　来書略。今時古の聖賢の説をとよみて。佛説と儒とは
して。神道に天地の理をかしこへも。暦数をまなぶ事しきを
以て。いよいよ人を迷はしむ
返書略。其暦数ハ聖賢の術をおほく仕ひて。算数にてよみ
ものハ。委しきまなぶに。其圖をもちいたるものハ。及程よかるゝいゝとて
も。人の心をしらすとおもふ。かならす様をこそいふにしたかひて。信しかたし也。
かくのことく人々にて是非をも志ふよかくに。数と器とハ
別にしたるものなれは。別にハ。数ハ聖賢の術なりてハあれさ
かゆへ。用ひく。圖をハ経説をも用ひ。或ハ我利口をくはへなすと

往に圖ハいか様よしても。あつさ寒さの日よハ。渾撼なりけり
なれバいひかたけれバ。聖人の天地乃器を知し給ひしことハ。只
暦乃算法須ひ。民よ暦を授給ふ事よりおこりたり
これ実する用あると其ことを人よつたへて。奇物とおもふなる
つまれこハ。おそれさる乃經まては。古の楽しき器書ハ秦火よ
やけうせたりと見ゆれとも。大かたハ書經よ残りけり。經書の説多り。大
明ハ天地の中よあるけれ。其渾撼ハ夏至よ景あり。天竺ハ天
地乃中なり。故よ夏至よ景なしといへて。これなくて日乃あるか
なる理よしるれことなし。人の其眼も。おなあるまく。日月
を南よりてめぐれハ。大明ハ中國なるゆへよ。夏至よ景
あり。天竺ハ南なれとも。南によりさる國なるハ。夏至も景
なし。むかし周公。地の中央をりしめて。王城を営ミ給ひん

ところ。土圭といふハ。八尺乃標を立て。日の長短とちゞみて。四時の
序を辨へ給ふよ。冬至の日景ハ一丈三尺。夏至の日景ハ一尺五寸
ありき。按るに日月のめぐり。地よりはるか。星辰とは小外津とは
ことハ三万里なり。標の景一寸ちがへば千里つゝ差ふものなれハ。夏至
の日景一尺五寸にてハ一万五千里なり。故なるゆへよ地乃中とし。
冬至より日漸く北の方をめぐり。夏至より漸くに南の方を
めぐれバ。冬至よハ日の短きことをいへり。夏至よハ日の長きことをいへ
るなり。故よ。夏至の日ハ北の方にめぐりて。標の景一尺五寸なり。
これよ天乃東南ハひきく。西北ハたかし。北極南極と天の中なり
といへとも。北極ハ地をはなること三十六度ありてあらはれ。南極
ハ地を入ること三十六度にして。つねよ人の目よ見えぬ。故よ中國ハ
其の中。嵩高山を。天の中にあたれりといへて。これより天の中

にハあらで。心の中にあれども。中和の氣あらはれて。天下中と
云理なり
一来書略。世中執着むさくハ。人に狐乃ごときものおほく。奇特を
なしけると。承及ばいかなる故にてはべりけんや
返書略。上治の世にハ。天下に邪神なき故に。狐狸といへども。
妖するなる獣(ケダモノ)にてそれば。中治の世にハ。邪神獣にやどれば。乱世にまた
よりむさくハ。邪神人にやどれば。狐狸の人をまどはす事ハ。
少なりてあさくは。人は人をまどはすこと多して ふかくば。或
ハ愚かなりて傳へいふと者もあり。或ハこゝろきふによりてまどはすを
ものもありとぞ。邪知あるもの人を傳くるものハ。皆人の
出家の狐狸なり。奇特をあらはしてまどはすものハ。是によくの邪術
なり。是もまどはすものにてそれば。天明によりて深くまと

いふ者。甚害甚し。又名利によりて傳へいふ者あり。人の
心未定らざれば。へりくだりて分別裁判。出来がたきものにては。
故に世乱ばいかんとなれバ。先人の心を傳へいはゞもの。偽多出来る
ゆへなれば。先ど以て聖人の政ぞ。人の心を正しくなされしを。
失ひし其道なり
一来書略。儒書多くよみ。人に講談ませて仕はもの。友人まで異
端におちいるは。喬(ケウ)木を下て幽谷に入の甚しき者それは。いかなる
ゆへにてはべりけんや
返書略。一人ハ知より心の徹しき所なくば。書をよみは事ハ文
才の器用なるが所。又ひ傳にひろくを知れば。又一人ハ心は
足実学の行をりばくハ。あまりくは。實学ふなとひく徒より
者をもとめて。才をも儒学となりてはべりき。心智に氣根あるも

へ。儒者は且専としてのみするべくは。儒学と仏とあふなり仏法
あんなりかたくしたれて。人も何ゆゑとそしるでは。仏は入べく仏法わき
まへはよみつゝそれにつて。誰もさらに然るさとれ。其上悟道み
かて修まく。平人よりも我すゝたすぐれるものとそれは彼
是也。たとへば。仏に入りてよりせしく。我まとせんとのす
ゆゑくれは。又儒学もする人をハ。人みくきれつて。濟世の修まさ
けよもなるべきうちで。仏によりくれはありき。人のかたらは。いつまと
にもかくもおぼえぬ人すては。志てぬ人乃ひやうとのみ。
萬にて石学のれさまでけけそれは

一 素書略。古の儒者と。今乃儒者と。異なる事はなにや
返書略。それ儒ハ古の官の名なり。初めく周官に出たり。
郷里にて。人に教ゆるハ。百藝をいつくしもるものを儒といふ

也。其後儒官史官相通するか。史儒ともいひしとみへたり。
將識を以て業とするより。徳なけれとも。博学なれハ用
を達すと。論語に小人乃儒。君子乃儒とあるなるをみれハ。儒
ハ文学ある者乃称のことし。大抵志あるふるきもの也。大人とは
是ハ文学して其徳を明らかにするものハ。君子乃儒なり。小
儒にたゞ文学ふるものを小人とするなり。文学して産業とするもの
ハ小人の儒なり。今時儒者といふ者ハ。おほく八小人の儒なり。
博学にして禄をうけ。國郡の主乃用を達すれハ。又史の儒と
し。其教に天性文学に器用なるもの史儒と成て禄を
するとても。へるまじかるさるなり。己を知るものハ明なり。ゆゑの
儒者ハ。己を知らずとも勝ものはおほく。君子は
人の儒を明言せさるによりて。儒者の行ハかくいやしきなり

いかなる者なれども。右徳の罪人なり。右藝とハ何なるをいふや。
礼楽弓馬書数乃六藝なり。古ハ此六藝よ長ぜしものを
撰て。儒官となして。人に教しめ。士君子を助しめたり。
曽子曰。籩豆の事ハ有司存せりと。日本の儒者かく云ものの
ハ。六藝ともなくして。たゞ文学に長じて。教事を行ひゆへ
なき者なり。去りながらも此一事ハ至し。士君子の人情時変を
かんがへ。國家の政をとるべきことにてハあり。されバと
ならべき経よりも。受べき禄をうけ。已かならずむをいはぬ
さらにして。士君子の才をかし。与とまさるハ。古の師儒な
らん。尾州乃亜相。ある時学の儒者に仰くだんちハ儒者
くと聞ゆるも。そのよき場をしくはしくへき。儒者と言へ
なそ。ひつめんと。おもひまへ家業をも目かけかしこくあるの

御ふミ入しと以へて。まことに妙香院以後の儒者ハ。なかなかさ
ゑれり。実ハ商人のいやしき心根ありて。かの聖経者
蔵とうりまうるれバ。人乃あなどりもてあそび。人のめぐみ
をうけにおもはれ。されバ已とせ申くなり。なまじゐに賤しからバ。
身ハ沈けるりて。そのよき場をよがくるべきまさに可ならん。日
本のくにも今までて。儒者ハ武家にありて。官につき子孫に
守られたり。才徳あるハ高経にものなりたり。多ハまぬかれし者
吏儒のごとく。吏のごとし。文え妙香院。出家よりきくに儒者
とのかれど。武家にも如くて。武家にもなされバ。からバこそ
まはく。武家の入道のごとくにして居しまつり。儒者の髪をそ
なるとハ。先よりはじまりると以へて。医者のごとくに法等も。
名道三など二三人出家よりかくに医師と成るから。徳を

武家の人たてなく。あしよりこのまて。ゆるさるることと
いへとも。かみを剃も上手なれ合にあられ。已とおしなることの也。
あやまりを知人もなくしくありとみて御座いまくらとも
しの様よりも代々剃様よと成行たん。今ハかみならさんま
ちさ商人さへ。刀さして武士のごとくいたくあるき。侍とハ。
ふよ小僧医者も上下着て。刀さすむハ。世よふかくへまするよてお
ならへ

一来書略。ちん度義ハ。山そ草木なまりねきハ。かゝるみなれと
ひもなく。且草木にみをみてそて十日も廿日もなくてま
ありぬみもとかしかしれく御座とハすとも農よかくり
いへも。似合しきそよ人をハ。兎のかしらよみ代りけるかな。
坊主のかしらよみをかけるかのことくみくハよの事まよい経

乃後と感しやれハ。大河といへとも。方くれ谷くのちうち落合
積て。末よ大となれり。昔節川そのみたと見れて。ひろうの
栗荻の下露と兼ハ。ちまたハ山沢宇を通して。神化乃
所と面もさうの不存知らまれハなり
返書略。我山賊よきなり。大和国吉野河。紀伊国熊野川。
伊勢国宮川。此三河のみなもとハ大臺か原と云。三国晴天白
日の時ハ。此原も晴天なり。三国のうちかゝると曇。荒くも
なからかくも。此原の雲雨甚し。他よりもさひしく見れ
ん。雲の山を吹かくて。霧れ深谷よ叢(ムラカ)ふかくて。甚
よく登る時くの。かり行くきはよ。弟の如くて。太雨よ
なもなれて。又ハ大氣晴くも。此原よハ雲雨の字雑られ
も。甚廣さ方一里なりけり。雨ふりてされとも西風なりハ。

亥川のなどもあし。北風には熊野川のなどもあし。東風には
吉野川乃なをもまたし。皆これ所によりてハ云せられを。
これより津はおそし。只神宮原にまみち。なる気風りよ
こされりとも。白日の時といへとも。甚雲をゆうこれし。これ
その澤乃雲。萩乃上露しいふものなり。山法宇を通
とり出るなり。其外こゝ山深くして。名所には。秘密と云も
のあり。同理なり。岩洞より湯出るなとも同し。神理なる
と云ふにて。遠よりてこゝかなよ。数ハ多し。なかハ云説よ
アあるくトにつて。人の口よ有くはのせそなりとし。岩
この不なる露乃云ひとも。おちそふなとも。自縁の縁なり。
云ひまても三十日すくも早とうかハ。甚ふなハかくれぬ。
そのなよなれをそしとも。こふなとハへとも。神宇のうす

まれも。これ流をとゞこほらしむるなり。当時深山多くはらはるゝゆゑ
国々ハ。山乃運上多くして。一旦ハよろしきやうなれども。山をも
ちからとハ大なるのちの為なり。山川ハ天下乃源なり。山丈
川のあるなりて。古人乃心あらて。さしく立なし山沢をきらはあ
らし。一旦の利を貪るものハ。子孫亡ふといへとも。諸国
たふれかくれて。なかれても。天下乃源をそこなふべし。
かくて世中立かえし。天地いまゝ中なるべきみすなるもあら
されと。兵除の理まで。必乱世となるなり。乱世と成
ねまハ。軍国乃用。兵粮よ雑役ともそれハ。家屋乃
費。堂寺の奢となるをへきもうなし。それ同よふてせの
ことにまかり。川としりのそく深くなるなり。国郡を
ねらよ人をあなる。あなれ時忠節なとゝ志はるゝハ人をそろし

て國に立たし。事ある時に到りてハ。私なく人たれ。今治
國をとゝのへ。世に大忠あるべく意及ハ
一 冊書略。古の人ハ。山川を治る政あるなれハにや
返書略。上古にハ。地を祭り縁に封して人ハ。名山大澤を
ハ封ぜられざる故ハ。雲雨を起し。材木を生し流川を為
し。天下の用をまかなふ神霊あるハ。一人の私とすべき事あ
らざれバ。故に私を入ず。材木をもし。家屋を作りなして。國
天下の山澤をたもちて。作りとすて治むる制法をかたらく
りき事ハ一旦の書簡乃及とうべきにあらざれハ
一 来書略。國々に在る志も有も出あらく。学文を好むもの一
とも御對面なされハ人に。江西の手筋をきまりてハ。
しかしハいやしくも及ハざるしよの其学流なりさいかく敷

へハ。志を実にせバとも。文育なきゆへに陽儒陰佛なと云
やうなる不正乃学ばれは。江西乃学術とちかへて。あ
志ある人をとかそれハ。又世西へもしいなく仕ハ。なかる者の
師をゆてしいとのハ。なかにハ中江氏の学の名をかたりて。
門にハ後世のてあゆ仕いへて。文学なく志もなく。何のより
なき見物いふゆへに。ひとへに風俗に成ゆき。或は従
當なかましき口舌なと。おまいまなむの仰ては紛なきする
よハ。名乃ほかの大根いきなとをしろうしき人にかまいて。と
あるしいへとも。世人ハ其実とをねせして。学友とも名けは
へしおきまれの罪ハ中江氏をそハおむへからすいは。今
よりハ志ありて。居名をいふ人に。御ありなれ。ぞなれハこれはし
返書略。同く承及せる事にハ。栃本よ病者まて人と

對して久しく疎かならざるときは。二三度もうちつづく。人の心
出合ふべし。すべて総ての事外は。学者のなすが教へには事
なく、ハ。おもひよらぬには。志れられ氣に通じては心から心を
方より寄るときは人にハ。教ふることそかなはねども。せめて
一両度づつハ對談して。文武の德業心法のたしなみ。其人
の受用せらるべき。人徳の場をもとめ得べく。遙し
度ねは後。度ごとにへだし。世間の事ども身をおのづから退けれは
へて。不及是非は。ちよくはくめきまするの有る罪ハ。おそ
ろしき方の身よからざるは。一生の虚実の遺言。虚説を
負ふ。後べき者となれは。天地神明の照覧をおそれはし
くはべし。たとひ後よりハ。その瀬々しき事どもの身は。おのづから利よ
りかくはべし。無実の罪ハ。ゆく人に云はれてしくれは

一 来書贈。法令法度など。人情をよく知て。時勢位に。應じ
たりと兼ねは。尤の儀ながら。昔者法て是を取て。政とせんこと
あるかし。然るに。君とだに法で聞く。時の学者。唐流
を好く。日本に行れんとせられば。人心にかなはず不可ならは
く。やめ給ひぬとこうも給へかは。おもしき事にしてそれは
返書贈。是と法とハ別なるを。そのまぎれと。知られぬく法
と是と混じて。おやまりも多くは。法ハ中國の聖人と云
とも。代々にかはりは。況日本へ移しては。行ふべき事多く
は。是ハ三綱五常これなり。天地人に配し五行に配して。ま
た德の名なす。聖人の教なかりしかとも。此是ハ既に行はれ
ぬものなる人生せざりしかとも。天地に行はれ。いまだ天地
生らざりしかとも虚に行はれ。人後に天地無に帰

をさしゆへたり。己が教とせり。況後世をや。法ハ聖人時處位
みなりて。事の宜に隨ひ制作し給へり。故に其代にあり
てハ尽に能とも時去て聖人位かはりぬれバ。聖法といへど
用ひがたきもあり。不合を行ふ時ハ却て尽に害あ
り。今の学者乃道とし行ふハ多ハ法なり。時處位ふ
至治に叶ハされバ。尽にハあらぬも。法者のこゝろなり。今の法に泥
みたる学者ハ。仁義をもつとも。争ひ利害乃凡情遑へ。是
己が気質のかたよりたるに。事つとめ。法を用ひ。経学の
文理をのミ紙ひく尽者なりとおもへり。世中の人此徳あ
るハ此病あり。寛仁なる生付の者ハ。行事に非なるこ
とあり。大意をとるものハ。細行を不顧。篤実なる者ハ。
才知不足なり。作法にくはしくして。争ひ我満なる者也。

各また其家を恨て学ばんと好む者あり。初の三ハ徳に付て
乃病なり。後の二ハ凡人を根として。利をよくと論ずるも
能也とも。其生付文理にたよれバ。事を勤るに得ずなる
ものゝ處なれバなり。雁乃行に長幼乃序ある心しき事ハ。格
法者といふも及ぶべからず。鴛鴦の夫婦よく和して。別なく
しく雄鳥死して已雌鳥ひとりにてなすとハいへど。人として
よく其人の世にもふれし。これ為ハ陽鳥にて火気を多く得
たり。火気の神ハ礼なり。この故に不知不識かくのごとし。
鶏鶩ハ水鳥にて。水気を得たり。水気の神ハ智なり。故
夫婦有別乃尽不知しておのづから。これのごとく純乃なるハ
皆鳥なり。今の学者。孟子に継ぐ尽を信として。其ものゝ
あまりとも。只其言のみすゝみ家不の者にて。文義を詳讀

し。格法をいふのミなり。或ハ師として学ひし者を毀(ソシ)くハ。
己を是とし。或ハ他乃学者の非を揚なとせんとするハ
賢なりとも。名に利欲遅(タクミ)く。当世乃名を求て。毀誉(キヨ)に
動くとは。市井の凡俗に異ならすとくれし。況や他ハ只朱王
乃贔屓(ヒイキ)ともいへる所なり。佛氏乃日蓮一向に似たり。是
又た縁とも頼りなし。公家或ハ武将の装束して。是ハ
房詩乃大臣義経なとゝ名乗とも。其実ハ猿楽なり。其
もとより元公を不覚して朱陸王学なといふとも。其実
ハ九史なり。然れハ格法の学者心志殊勝なる者あり
て。説りんとも得ぬ者なりた。人情に遠しかくてハ言れ
ましくハ。又今の人情に志さりふといふものハ志して後ハ義乃
情に不適とへき道理をも。人情あしくとゝ行いとなとの

あり。此ハ人乃利欲をさまくて。義をもて救ハまてハ。害
事と義理とハ別あり。事ハ害なりとも。人情に戻り
なハ害ありて。義の大なるものハ。人情を悖るへきにあ
あらすは
一来書曰。他姓の子孫を立ることを法ハ嬖(ヘイ)なり。君子なるか
相も不義なるを。今の学者家中にも儒者の一流乃
様に承れハ。仮の事なくかしるを面白く思ふ学者も退
きハ。いかなる理にやとそいや
返書曰。生民の始ハ天地を父母とし。其化に依て生れ
ハ。人皆天地乃子孫にて。いつれを共にしても同し
事なれハ。古の人も同姓を擇く。君子とせしなるハ。故あ
る事なれハ。世に功あるも。天子より姓を給つて。使あって

家を起しゝ徳乃子孫代々繁栄せしにや。是有徳
無功の子孫あるを不立して。無功徳の子孫とし同家
なるをいふそなり。縁なく絶けたる。いつれをなりたまはいて
不叶るまゝに。又有功の人は同姓なりても。不徳不才なる
は。天下国家の経営紀要なる人を多く撰擢るる家な
とふは。立かたく其まゝい立へくし。無籍家と失ふへきやう
なるは。純姓なりとも才徳ある人を譲るへし。陶唐氏は有
虞氏と立て。季を捨て。季せしめ孫ふりて。主君より其を
祭をもまかせしめ。家とも嗣しめらるへきやうあるへき
るなり。又同姓乃子孫あるは。いやましの事。いつまれ不なれども
小身なりとも祭はまもるへし。禄は官職に従く殊るなれ
天禄なれく。天下国家大小乃かゝりはなりとし。有徳有才

に譲るへきの義なり。同姓の子孫にて。今は小身なりとも。
この法度に従く。後世又家ともかくとゝむへきなり。武家
なとし。武はゆつり。この二乃間は時の勢に志くへし。今
の学者。家語乃故事と汲くべしといへども。家語にはまし
かりあるも。聖人の語には有ましきと見ゆるなり。左伝
に。子とあれに。其家の氏を名乗ゆつりと見えれど氏はなも
身の氏なり。継先ら小長家の祭祀にあへかりわましく。
子するのみは同し理なり

一 本書略。学者ありていつかは。孝子として我氏を名のりせ
なり。我娘とあいらは。兄弟生婦しく縁なり。其非也
ときは。継なし。天下なとし。なへくかくれなれは。是言
は立かくに。諸人乃見学とうなむ一端にそには。乃理の至

称しおそるゝにあらずや
遥書略。聖人乃法ハとハ、人乃妻となれる者ハ。夫の父母を
父母とし、あるいハ我生れし父母の喪ハ軽くなり。夫乃父母
の喪ハ三年と定められたれバ。夫乃家に従ふハ。我兄弟父
母乃服喪をつとめバ。しかれども兄弟夫婦となるもあるや
理窟をもっていふにも能わるべし。又法ハ人の情にかなふ
は、おもひかへしハあまり不叶にあらるゝ世俗をしたがふ。
あるべきことハ毀る人もあれ。其国にハ直に変ずとも是
らぬとしハべし。況世界に成らハ行ハるゝやむを得ずあるべし
へきことなりハ世運文明の時にあたりて改まるべくは、これを
いつりハ改めることなし。公乃法の如実に不叶にしく。
何の益ありや。人倫きつと多く改むべき事ハ我心の凡習なり。今

乃学者已に心の凡習とハ不洗して。世俗をそしりて法を立
ひとしく。其心ハ俗まさひとり老者あり。人これを知る事なくより
笑へり。況とある而乃法ハ時勢にしたがう実儀ハ世俗にかも
優らするも八法の時によりて改むべき。吾人真志
あるハかくやつてすハ我のまことにする可なり。人と毀る
なかれ

一 来書略。近年仮名の出ぬよりしき書あらはれて。大方書物乃
筆作の様あらはれ。物まなびとしてもなれても。一向俗と存ずる書
多くは。又これまでにあるにより似たるものは註にありて。御書物
の内なるて書きたるものあらんは。御書物とも謡談しく。大
氣まじめ實ハ各別ちかひ候へは。世なりし人々清書
乃作となりたるよし候。実の御書物の益まして。遠くなり

作らじのことなれば
近書略。陀とふ五倫書なとハ。まことしく作者ありて。我等の
生れざる前に出たる書なれば。七十余の人ハ。我十◯前よりみたる
ものなれ共。志かるに我未乃書に拵りて。けふ批判の出
まで出かけは。さきに名も志らぬ書に。悪作とやかましく
兼けは。又愚作ごとと案紙かと似たるも出けれ。我等が書籍
と紛らハしく。再用するにくあるべくは。他ハ不徳にして身に余る
深りけれ。乃経あるくはゆへに世間の人によくおひたる所ありて。
我身を是はかとなれ。されとも部の志るを所ハ。悲しくは全く
当世の名利を求めとは。百歳の後ハ正邪明白にあらはれ
申は。一旦従ひおひ雖によおひ悪名を蒙りはしくも。浮
へかたきのごとくはへて。何とも不正なれは。当世ハ志ある乃人望

なし所にあらひ。悪し所にいひたれはへん。毀誉ともに其儀正邪
さだかなれは。百歳の後ハ。今の誉たる人。毀たる人。ともに定まれは。
好悪称り是易つまはへん。百歳不朽乃公論に成れは。ことに附あそ
ハ君子の名を定まるなれは。程子と東坡とハ君子と小人ほと
て黒白違ふる人あまそれはつまとも。其附にハ程子流。東坡
流とて。天下の学術二つにわかれて相争ひれは。後世にハ東坡も
一人乃詩人となれ。程子ハ百歳乃徳の師と仰かれ是称ひ。作愚
これに比なるかくハ左くはてとも。当世乃毀とさけと。誉を求
めとそ。夫く後世にあらさる実となれは。後世に恥あてとなれハ。
まさ公の神明に正してせさる所あまいなり
一 素書略。おなじ人なるもの和書たるなりて。名あるき人なるか。文
学捕まくしてみてとふ。甚あさまなる文体なりかわとおかるる

なかしてハおもハざりしと嘲りしハ。我党なくハ道統紹へ
とし。かく様よその人にいへども。御書物の世間へちらさるやうに
仕度ハ
返書に。人乃よさるゝをおかしみとすれし。ま之理乃深
遠なるゝ。其度なくもあるさまのハ聖経なり。ミる顔ま
して親切なるもの八賢聖よあり。後世の人ハ。文筆達者に
て。精を出しけれども。古代聖経賢傳よハおよびがたく
愚か和書の文意ハ。直にさとらるよあり。仮名文字にてよミ通
し易く。文章ハなるべきこそ。のハ清きうつくし。細まだちかき
と浅きハ。似く大ま異なり。世乃学者の書に向ひいふ
ありさ。其理を明かなるやうにするも。書物を好まる。平生の更
またりくハ。仮字の凡俗よるとおもハれるゝなりて又実なる

とかくかしハ読むとハいへども。聖賢の経傳をよミて。尊敬を
なし。其時変経乃至言と辨へて。人情時変よ通じ。一流を
なりて。大同の基本なれバ。つまるところハつたなき事
聖語を主ま交用なく。得まじきなりハ人の間よ益へ。或ハ
遠方の同志に求めよ。聖経賢傳をたまひ切く。日用
よ行んとすれ。道徳の政令よ通じ。学術の人倫よ行ふべ
き一助ともならべきさ。市の和書ハ。人情時変をしらぬなり
らんことをなすなり。道徳乃学者の人ハまよ合一なる益なり
え。浅よハあそなきなるべし。世間乃文学の政令よ用ゐ
まさる事久し。人倫と学問と二つよなりて。へだてさるゝ
をなげきてなり。実よ用ゐる人ハかれとも類あるべき
うのかくハ市ことの意なるべし。細かくハ今に益あるなるあ

らん。古に及ぶべきにあらぞ。後世に伝へられ。帝も又一人の
天民なり。天の民なり。いはゆるハ罪なることなし。

一　来書略。天下に仏者多く。書むを欲なりといへり。仏者にハ我
慢邪心の者多く。書むを害ありとおもひ。失ふことも祈
り。老仏者。仰仏のあらんことをすなはちに

返書略。世るに仏者多きことに。千万を以てかぞふるとも。
根を堅くせしことに千歳にあまれり。世中仏者に害なき
なし。邪なき不徳の性質。大人よりさだまる一身をほろぼ
世るの仏者乃欲とせり。仏法を滅すべきか。つひにあるまじ
今に仏者。人間世上をひくハ。いまに盛勢を失へり人也。
天命ハまそくに滅亡におよび。その故ハ物皆盛衰あり。
きりひ仏者ありと雖も。盛なることきハ衰へ。なきにしも衰

けなりんや。おのづからに今の仏者。不仁無道なるゆゑ。凡仏
に越えり。素より又邪ありぬ。是天命に経る所なり。故に帝
の如き不徳の性質をも彼らが欲をも除べし。
又に欲を出せハ帝を失ひし経るにあらし。帝の
命天にあり。用ひられとも失ふべし。用ひせざるも大失なる
ものなり

一　来書略。人に志あるものハ。けして飲食男女の欲にう
けるものあらハ。志の実ならざる故なりんか。又人に志なく
ても。仏縁により志ありと先生いつまでならん

返書略。仏ハ無声無臭のところによりつくみぞる。其事によりて志
あるといふ人も。隠微乃地の実不実をはかりて。又志なくて
仏縁による人も。隠微の所ある人なれバ。書物して又母兄弟妻

子を古今にまれなる人は一旦紛出におそはれつゝも終り
は古今にゆるされし隠微乃地にかくれ悪名にゆく俗きん人
の名に実形の亡ぶ所は名に志あさく一旦形氣乃欲に
ひかれ大節にいたしては我くれは形骸に志なきゆゑ
てなれば死にゆきて亡ぶ所まじくは志の不実とやうにて只
なし。実はあまたも此の世に蔽はれて亡ぶあらくなれば只
今飲食男女欲にうすき形骸よりても血志の定る所なれ
人に父母兄弟妻子乃あつまりより名あるてぞまよひ
より身のうきをうれしとおもふ志ありては後く何事にもうと
るべきやらんなりかくして今日のよさは精力つよくしる。
情々の着におもしろくる名根のふかくてなをともろうかし。は
生れ付く形氣の欲うらに従ひてもあまたはその身くらひふ

身へ八形氣おしろへ行に志をうしなひ本の志をさし徳
はなし。ものは昧しあるきなくして後世まても小事よりあり
情におもはつく乱るゝにあり行て男風になるなと
あり一旦のよれはよのすゑにいたりも月夜の志しうしなはさ
ふし闇夜の晴ともなし雲あらもそのものゝ上へしのふなか
しにもそのものゝ上へをかれ

集義外書巻三終

集義外書巻四

脱論一

一旧友問。王代をも頼朝。北条。足利氏の天下にても。広く智ある名ある執権の人々も。病人あれば。医者のさじにはなくて。祈祷するのみ記してあり。あまりに愚かなるやうにおぼえ侍る事はいかゞ　云むかしは学問ある人まれにて。筆とるものも書紀しるすものの人は。多は仏学より出たり。是故に他の事はしるさず。仏法のいきほひ。仏者の霊なる事のみ書たり。この比天下第一の事と覚えし仏の教なり。其上学座の僧たちも後は日本国中に。少月のあふるゝと覚えしさならのは。皆仏者なり。公家も武家も。仏氏の弟子也神道も教とし。むかしは明なる医経ありつるをとし学座

云くより。学ぶべきにあらず。儒書ハ文字の学なりかたく。仏
法のまた八法くどしにも。ものの理学とよびものなかなかなく
あり。儒を八儒仏者不のまちがひと知るのかし。さて何よりも
と。物を知識に附くまひだとおもり。ゆへれ名僧乃。武士あ
教訓する語をとかれて。皆儒の原理にして。出家の言と
いかにしても仏経八わかりもなき紀なり。儒仏の争ふ紀ゆへに。云和
の霊ふよりてり細ひと出づるとのへさり。志あれバ仏者。則儒者
わくもあるさき。それ浅くも理と云ものハ。只仏者のとおり。
故に聡明なるものハ。多く仏者になりけり。修行殊勝なる
ことのも仏者の中にあり。能く歴く知ある名ある人ハ。佛あ
よ儒よりとなり。今年ハ程子朱子の理学ひろまりねまし
く聡明なるものハ儒にぞせあり。仏学ハ次第におとろふ

成られし。仏学に心眼ならるもの八。心根に是非なる所あり。後世
と称するもの八。一目も志らぬ所行人もし。人相にて志らるまの
なり。仏の是非顛相におちられく。無知くどころ。なかも明なる
心あるものハ。聖人の学を知りても。ミな天下の法によりて。宗
旨ハさとしても。心眼をし。古ハ宋朝の理学れまじりも知り
し故に。歴く聡明の人ことも。たと知るべき根元し。楠正成。武
蔵守泰時など。今の世に生れあらバ。必と聖学と定用
して。賢人ともなるべし　同無欲なるものハ。仏者の中あり
ひり。　云ながら佛者に無欲なる者も。あまでしも。仏に溺に
あり。儒者に仏人なきハ。儒者の聡明とらしいのかさらう
ひあり。是なる所より出る無欲なり。さりながら千人に一
人なり。惣じく払多者の中にハ。よくなれくよれりあり又

まくれくあしきもあり。仏者の中にかすれやうなるものゝ
あるかゆへにハ。あしゝといひ。ハ。仏者やとはきものハ。又
なき仏法也。俗人なしハ。一日も生きくハ。どれかさき者なし。
まして仏者の無欲といふハ。うらへやとおもふなり。金銀
を持ぬやうにすれども。仏ほとく法の此を八。弁儀を
なれどこれも欲ともみゆれど。無欲かりてとくとけれ。
後生れあ。仏にまつりまたいへ。雄をはさし。磨へき
りのなげきハ。厳あつめて坊主に風体なり。貪あるもの。
ひとへ着を体と忘てねきもくやまハ。寺持とおもはくもの
ねがひといふくしきらすハおけまた。屋あるもの多きりの中ハ
まてくる者。たゞ小辨へれし。欲ハあつた。儒者にかくされよ
さかいちにとるものハ。あし。身小さるものを仏ハ侮る

して。後世のあんなるとハ。何ぞやらや。西方十万億土の阿
弥陀。南方普陀落山乃観世音。東方浄瑠璃世界の薬
師仏なとへゆくを。後世よばれ。西へゆくと功徳になると
云やうな法。理もなけれ思ふことやあるべき。人のこのれ
そこひくとを得ることしらへ。出家ハ法力まて世を
まるるといふハかしこきらやうなるまでと無欲としる同
八備よひの悪しきあり。富たるものハ人々を憂歎して。忘者
を体し。礼乃法を用く。財宝をわく。家ハ仁あり。貪なる
ものハ人をともに物をいだきれ。年寄く達者なれ。
手足れ堂と見なり。年をむものハ。人を礼するに
ちからをよくきれ。徳あるハ。人々よとも言をも用ても。
かくのごとく。不明ても理正しくくこそ聖賢のなるとも以

へきまれ。貪なる者乃志にハ。ちらつくれ労はなくして。ひとへに忠
ある物を制ねく。後世のさわにて。雑縁さするやうわらぐ。不
仁無たなるるやあるべき

一朋友問て云。或云地獄極楽ハ有る事なるかなれか有てとら。
あれか有てと申さハ。いつさる善方あれバ。後生と称くへけ
るものいきまする小善事ともなすほとし。皆本のまゝに悪と
してゆわの世をとる給んと。我等この返答いてくる給
まてなれといいふて悪をとをへし。又有といいたる給ある。虚言る
料もも有ていゆくく悪徳させぬやまうり給ふん　云昔
我等ふかくのてく君しへあり。無善にハ。地獄ハなれか有こ
とあり。信者とくかされよ。悪をなして甚方の仏にこゝろつよく
ハせしとよ。小悪でも人々も。積まへ大をあるとゝのなり。後にハ

悪つく世ま嫌く。何ともかららとこれを悪人といふ。悪しと仏
と化されんなり。然ハるら十一両まされ。大ハかくて下まは後
くつとく善人乃門にハ吉事あ門まり悪人ハ家にハ出る
あ門まりとのあり。後生までもなく。現在にも吉事去
悦安楽乃仏ハまうしひまて。凶事憂悲。忿逆のこゝろうす
きあるハ。是非に及ともそのこゝろん善人れ子孫ハあるゝれ
福よくさかえてのしい。悪人れ子孫ハ。あらぬも徒合あしくおと
ろへる侍しひ。終にハ亡親のなりゆく。子孫く。能も不役ふう
ものなるふ。をさらえ。もく仏く事ハきつらひとそ。おと
ろへ亡ぶ事なるもとれあるハ。人の仏ハあるれものなり。人の仏あれ
とのよハ。何をか給ん。我よく人ゆくよく分別されよ
といいまれた。其ものの赤面して跡してしまひぬ。数日あ門て

ありなば恥て。其罪を謝し奉
一朋友問て云。さやうに辯ずれば人ハありがたきものへし。地獄か
しきりひきうせて。悪をなさバいかゞ　云我等のちゑハ
なし。悪をなさバせよといふなり。人の善心ハ伝ふ仍なりや。
今時の仏者ハ後生と祈る人ぞ云ハ。善心を亡すなり。人ハ
乃ち天神一神乃神明あり。是に生れたる縁まかの魔
ども障りなし。天地よりうけたる。天地まで清く。不義をなく
ゞ悪を防ぐハ人心の霊なり。釈迦いふ地獄乃説なすハ
されバ人に善人多く。国家天下よく治まりたるハ。是説
據なり。地獄のなきをもつて世の悪をなして。よろしくへ
せよといふべからず。悪のなきことのみなし。心の神明
よく何ぞ悪あらんや。其がうき故なり。大高生といへれく

たゞ一命をもちてん。いかんや悪人といへる輩。悪をなさん
きやうありとも悲しきなり。なまじに殺さんよりハ。殺さる
ば恨まれず。まぬつきをして。とけバ。人ハ天性の神明あり
それ故に恥の心あり。これ悪を恥て不正を善心と云ふなり。
又今時後生のことを云て。人の善心を亡すとハ。仏者の説
悪ハ欲無欲をいひて。義あるまじを不知。西戎乃教
なれども也。欲といひて。阿羅漢を財宝を海に捨るや
うなるもあり。欲といひて一命をしむるなり。人の不義
をなさず。義なるハ恥の心よりなし。故に義なるの無欲を
し。高生無欲といひ義なるの仕儀とハ高生のならさきと
云。これ仏者によくハ上根乃人なり。下根の人に云ハゞ元来文
ハ欲悪のなすなり。戒をまもら。善行をなすとハ。仏菩薩

乃上なり。さて欲悪なくして参とけるへ。妙法蓮華経。此人
なる人阿弥陀佛と云けるに。欲悪と安じて。恥乃なくて。善悪
と云けれはわるきとや。是故によく後世の取よきなくて。悪も無
道なり。涅槃よそれをも編まさるれ神明も。伝説によりて地獄
に落なりて。欲りききとりとをあまりなき。是とならん彼らるに
おそれなくしいくのなるき。七竅鑿て渾沌死となる成へし。
昔文盲なる男の。六十計にして姫をめとりそのをそに死なんとせ
しを。其子君にて云。何もとの上人和尚なとも佛のたのみ候旁
母情しと申て。法號のとめをうけてきへとなくさけりに儒者か
云る人あり病人これを招きて云釈迦よりこのかたハ幾
年て。儒者云三千年はかりて也。病人云さるもこう乃聖
代神代ハいかにとかや。儒者云。それハ一万年二万年とも云

教もなかりし。それ来きてなり。病人云。さらハ其をきし神代乃人
のためしなとりとて後き
一心友同て曰。東坡ハ経傳によく達して義と辰てよりて故
に程子朱子も其語ととりあへす。さるは經に落人。男色より
まとひなせし事ハいかに　答て云仁者ハ必ず勇あり。勇者
ハ必ずしも仁あらざれハ人にされて文才と仏法ともに又悪
なしかるにさるとあり。仏法明なるものハ。文理とものりなり
通なり。文才あるものハなれば仏法よれよあらく法撥
ハ文才に秀さるものなり。ゆへに文乃力にて經義をも通せ
しなり。さるまでも実ハ我慢にて。人欲のさかりなる者なり
き。この故に其身仏法ゑらんで。くハ仏を口にて又へて。又経に
入し事ハ。なれしも仏になりてはいるまでかはりなし仏根

邪経なることのみにて男色等の私欲さかんなり。しかれバ聖賢
の門に居なから。無作法ハなかなかなり。仏者に志ありて私心
邪欲なるハ。世の害なり。甚しき欲に種々のわる事をぞ語ぞ
これよれバ。何事としても合点しかたきと云事なれバ。無作法
とゆるかして一度してそのまゝよし。ことよろしくたよりなる家にし。
仏法ハ本悪なる法なし。愚人のことを教しに。東坡こと紀志
ともなり。世とにかゝへて。聖賢の性理文章をもつてかさりたてる。
故に。ここにしなる者の根に成らり　問仏ハ甚しく悪をもつて
なくしるもの也なり　云根本ハ菩提をもとめ悪ばくるさ
ひの教なる人けれども。よく此後世よかかれバ。悪人多く其
門に入て。悪きことなりぬこの教に信じてわしきハ。まつむる
ものもとのことなれなり。聖門に来てわしきハ。人のよろめ為に

く。甚だしもそのかしけれとハ。終に入なり。今時日本にてもしけぬ
くひ多し

一心友問て云。仏者ハ学をとゝめて云ども。其理乃うらはくるす
と不知して。兼れても。終にそのまゝ人つまく。天地陰陽の間にそひて
あるもの也。法をおせらるゝこともなく。此理にすあまさいなし　答て云。
理なり内外なく。大小なし。天地陰陽則理なり。其ゆゑとして
となる人のさるゝ理をもつて。学のことを見ぬくる故に。陰陽起
出の見もまし。しかし我友禅者に問て云。座禅して如何なる
や。禅者云。終日座してもかしてより。きさ大事何ぞや
ひとくそしても出きても。息あへるとも。静坐のよにはそのとし。と。
我友云これ寿なり。我もしてわかりもし時。ゆゑれの馬を
つなくも。息あへてかしに。今ハかたるをいつれても。息なる

し。老年の故なり。むかし僧も年より給ひて今のやうにハあらぬ
し。出家の後ハ怠りがち也。其理の功ハ年よりさきの修
行によりての事なり。年よる迄もちゐる事ハ乱なり。いかなる
賢聖かくも仏菩薩なりとも。大傷寒にかゝりてハくるしい
ものといふことハあるまじ。癇をとりのけて。ふるひの出ぬといふ
ことなし。されバこそ仏とてかゝるべきのことなり。
釈迦も傷寒大熱気にてもだえたまへバ。衆生済度乃方便乃為ハこ
といふべし。孔子なりしハ君使のうへにもあるべからず。李とゝもと
ものゝハ世をもちゐる間にも乱すまじき理をさとりたる者ハ。
其理をしるべきことなり
一 朋友問て云。三教を空海が書たる地獄の絵ハ。我も怖しく思
ひて書たるか。人を教せんと見せたるか　答て云。むかし

我友に今れてしく聞し者あり。答てハ後にしも其のよく書たる
なりがたしとて指学して偽とも見へハ坊主ともハ居さる筈の事
を信とる所理なり三教ハ儒を第一浅しとして端に書たと
それより浅しとうらて中に書仏をもてよく奥に出たり
仏者の筆なれバ仏を上にやるべし。それゆへ二教ハ大方小書されたり其
出する流れ文をもよれども儒ハ高く仏よりも下ハ高位にまもりひ
よるもの様耳目にハ仏をよしとおもふべきの道にたゝぬものゝ知め
ハ。第一にはよしとおもふ。仏教ハ第一にあやしく浅ましく思ひ病か
ふ教なり。あらうたる故。悪たる者ハよしとおもへて。仏者
はハ心根の愚なる者なりそれハ知らぬといふべし　問。釈
也より其つくなれば空海が浅学故か　答。釈迦より外
道。法経をうるに。釈迦ハかへつて空海が半分も学問ハあ

し。文筆も達すなし

一朋友問て云。釈迦の国は戎狄とて。けだものの生合の人とききく。
虫鳥のたぐひのものハ。生なりて変化して。生を継ぐかりてくなる
ものあり。天竺乃人ハ。人の形あれども。人の心全からん。故に
生れかはりもあるらむ。されバ釈迦の見わくハ。
輪廻の見もある人なり。人心正しき。中国日本にあらく。高劣
乃境界とうつしいふもしれるすなれ。儒者ハ守りとて
理をしれといふも。人倫にあらざる故なり。元来無明法性
ありといふも。陰気のりを無明といひ。陽気の元を法性と
いふなり。答て云。それも天地の造化に輪廻と云るか
けだもの。畜類とても輪廻をしれ。されども。たとへのものハ。掌毀
偏僻にて。神理乃照全からん。この故に愚痴に欲ぶかし。とと

うまれたるものハ全く理をうしなく。畜類よひとし。禽獣ハひとしき
ものにおもひもおもはず。人の知識よおよぶべくもあらず。只欲心の
みにて全くかくし。其沈魂滞魄化して。欲ふかきものハ畜類と成
我慢なるものハ天狗と成。猿の子ハ猿となり鳩ハ鳩となるなり。
やはりなくて。愚痴の形をもってして根本の理ハあると録た。
今日の事なり。南蛮戎狄小狄ハ。人の形あれども。けだもの
のなる不文なし。されバ其境界ハ人に同じくゆへかなふ。問曰
本朝も亦至らぬものや　云日本ハ天地正しき国なり。太陽の出る
国にて。人の気質も美なり。天竺のやうに輪廻の変もなきを
ものなし。霊なる故に欲にうとく。仁ふかき有る故なり　問
曰。物にも日本ハ輪廻妄執作の云ありしや。
云天竺の下国ても。釈迦。文殊。達磨てふの夷なる人有。

日本にても。百人に一人ハ。天竺人に似たる者もあり。然れとも。
あされ中のよう絶なれバ。天竺を経くハ。偏且体すてにハ。動く
まで。経絡乃まよひとなる故に。神く沈魂滞魄の変生じ。
同東夷ハ大陽の出る国なる故に。人の資質異なるぞ。師
うまるれとも。日本さてハ。三幹。琉球なとこそよけれ。忽
その人なとハ。天竺人ほとも。おろかなる人を仰り　云東ちりと
然ると精粗あり。日本。三幹ハ東夷の精国なり。然れハ。小
狄につきたる出なれバ。東に[illegible]りて。日本にをしといふべし。
小狄なり。西戎のあしき中なりとも。又精方へし。日本三幹に
ハ及ばれとも。戎乃精ハ。然れ人にハ偽さるべし。然年まく住
来せし商人の物語ハ下国なり
一明文同。大和西洛にまく明かなることのハ死して安の云案[illegible]

法乃現世後生に似たることの練り　云佛法の中らしいの
こりあはによりてこうひあり。経法もてうさはいかなれ古人
乃語に。天道我を常とするに生まんかし。我と安とるて死を
以れて以ふ。死生ハ昼夜の如なり。昼ハ務くの不作をつく
多くおもとなり。夜ハ寝く。休む乃理なる故にいふの
なり。堯舜の民ハ。死生をさること昼夜のことし。何乃うくくの
ひもなくしたる人倫に明らかにして。異端のまよひなけれ
故なり。堯舜の民ハ皆善人にて。悪人なかりしなり。悪人
にてはまよひなきものには。後生のいつはりといふくるしみ
らうきんやありなし。鬼神乃得利ままし。めしすべき梧ま
なし。堯舜の古代に。秘道を出しさしハ。一人の気ちうひも
のくなる人も。そつく其狂病をいやさんきのこなら。名と

見ほどのハ生死をもて心と二つにせバ。人の身ハ心の中より
生れ出たるハ。魚の水中に生じて居るごとし。魚の出来たる
ときより水もまさらず。魚ハ死するも故に水も減せず。死生なし。
水ハ本の水なり。其ごとく。此身ハ生死すれども心ハ本の心
なり。春夏秋冬則載心なり。心の中に此身の生ずるハ。
大虚の青天より。雲の一ツ生ずるがごとし。死するハ
雲の消ゆるがごとし。身死すれバ。此形に付たる。情欲乃心ハ
なくなるも。氣ハ今も天地とひとつなり。されバ人なきまでも
なく。今よりひとつなり。形ハ今も地上にあり。死すれバ土
中に入りて。土とひとつになる理なり。氣ハ命とて人にて
のごとく。身ハ命と人と其のごとし。氣の青故に。身もうれてわ
つくるなり。死ハ氣と形とがわかれてなるなり。形ハ地に帰

すなはちなり。またつねにハ天をいだきてごとし。氣のあつまり
て。人の形をなしたる所にハ。魂あるなり。魂の係る所ハ死と夢
なり。晝一日うごきてゐるハ。魄の精きハまりて。寝てをる
と同じ。魂より前にも鼻口ひらきて。息絶つれバ。死を
なハ。寧もなかりて故なり。何の別事もなきに。魂去ていふ
いづれ老なりいふくれどもいふ。多くハ人を懼さるゝ
ものなり。此まよひおほくあつて。生をく明らかなるものハ。死
を恐ることなし。心安くハ死せる身に。生て明の
なるものハ。死して安しといふなり。生死と昼夜と同
しくして何の心なく死を恐るゝなり

一 心友問。寂滅乃教のことハ。大学にもあり。実なるものぞ
なれどいふ所ハ何なるや　答て云。寂滅言語の妙にして。

見解のうゑ上なるかごとし。然れ共仏の教へハ、人のまよひあり。言語の
うゑしてなれバ、ひとまよひ、遮く実なる所あり。仏乃ひとまよひと云ハ、海よ
ひおほなり。悟道のうれ仏者と云も、ふく凡情の利欲よ。盲從
れまよひ、代ねけ出るのことなり　問利欲ふくまよひたるハ
悟よおもふとや　云其ゆへふとあれの則ますまよひなるを不
知。釈迦よりふく衆生を、まよひてくハ、一日も出家してハ居られず
てあり。造化の条理とあつて、輪廻と見るなり。是故よ元本よ
無明法性を立、生れかわるの見より出て須弥山をたて、三千
大千世界を作る。然れ凡然知して悟道とする所ハ、まよひの
根より出たり。根本の条理を見んそこなひ異代を立所なり。
まよひやわらへき、まよひの仏印とひとまよひ仏や有へき。一旦ま
けてく造化を輪廻とせハ、聖人の言にふ非なり。造化ハ輪廻

なれバ、故よ。仏氏の言ふふ非なり

一問仏者ハ儒学をいやしめて、易学ときゝても、暦律算まなく
其外のものなし　云根本のくらきゆへに仏家ハそれをきれバ、仏も
それにこりかたまりてある故よ。儒学をはくいへり。餘事と
して仏よりいふ、仏と並ぶ所とし、学ぶ所と二つにわかつなり。一日
も出家ハ仏ほと行して、出家となるものハ後生輪廻なれバ
ならずと有ても思ひ、又生まれかわりの形ひなり。形あるものハ
一度ハ死し。草木國土。悉皆成仏道なり。是故曰、仏ハ無の
称なり

一心友問、仁と慈悲とちがひあるやといへバ、思ひ續りあり。仁と
いふハ、人合点なる故よ。慈悲とハ仏なり　云仁と慈
悲とハいかにも合点させんよりハ、一向よ合点させぬかよし。

仏氏の慈悲といふハ。禽獣に施をほどこせなどする事ハ。人を
あはれむるよりもふかく。慈悲とす。これを以菩薩の修行
とするなれ共。仁ハ天地の物を。生育するの根本にて生
理なり。人に有てハ。心の徳なり。無欲無我なりて。万物を以
一体とす。其孤をあはれミ。能しきを見てハ。心自然乃
用なりこらへべくもなし。天竺の法ハ。禽獣をとし。
是故に義理乃性。明かならず。性理乃仁をしらず。婦人姑息
の愛あるがごとし。中国乃人ハ。夫婦をとり考ひする家中な
まハ。自然と仁徳ハ国有しなかりき。我も不知。長生不死を
仏家の説に偏よりあくに仏説にまよひて。仁と慈悲
とを不同しやうに覚えさるなり。日本にてハ。甚あやまり
と定さるなり。去れども日本ハ。大陽の出る国にて。神人

霊なれバ。仁徳の名に。明かなる事ハ。中国に同じ。いまさら敬さと
もし人なりしかバ。みづから除玉の。石にまさる人ハなかるべし　同
去ながら聖人の無欲と。仏氏の無欲をみちびいふや　云大に
半なるべし。仏氏ハ其日菩薩に。物を菩薩とぞ施さるゝ故無欲と
して無欲とするにたらへさるものなり。又これ物をもつて気
のことわり馬の大豆をゆるしひく。腹にこゝろハはなく
りゐくぐこかそうつくなるまとつく。人の無欲とせんや。人ハ
れ無欲ハ大に異なり。さて義ある事を知て利をもとむ。云
義に志さる。私心なきを無欲とす。さる人ハ義ありとは
よりあるべき義あるハ。あるべき蓄へき義あるハ。さるべし
施すべき義あれバなくとも。とかの義に志さる。不を無欲
とし。利によるを欲とす。されバこゝろるものに。無欲と

欲をまそれぬるものゝ上に立居たれバ。無欲を作く身にて利ある
ことなれバ無欲よく成るにハ無欲に似たれとも。名ハ利によるか
つゐまするなれバ。名によりて無欲を嗜む。或ハかく称よく
修行して後生に成仏をしたき事もあり。或ハ無欲を作て一
生のたれハ心のまゝにならぬ事もあり。其乃無欲ハ名利を倹遜
なるかゆへ仁愛なり

一朋友問。今時まことに後生我執の中にハ我慢あしくおへ
人なるもの多ハいかなるゆゑにてや　答云此論も。
坊主れとも我乃あしきゆへなりと云者あり。何ゞ婦人これ
を愛さく云。悪癖なる故なりと。此義あさまり。後生をとも
願ふ我ハ。我の悪癖なる故なりくしき所より我慢を
あしく悪人とハなるなり

一僧に問て云。世中の出家乃言に。慈悲善行ありても。仏縁
をしらされハ成仏なる事かたしといへり。僧ハ何と心得ら
るゝや　僧云。勧学院のすゞめハ蒙求をさえづるといへ
り。是縁なり。勧学にても多くハ。さへつるまなひなるべし。佛
を祈りてハ。成仏をすへきやうなし　云。仏に成ものハ。ころ
なくしてや。自力をすてゝ仏の縁をかゝりあふ事なれとも。何ぞ
か成仏をすべきや。無仏無縁なから。後生を願ふてハ。何ぞそ
や　僧云。他力なく志ふかくなり。ひたすら仏を願ハんと思ふ。
仏乃おしへハ又自力なり　云。釈迦のあまた経仏人に説く
ちまし。ハ仏を求る乃自力によりて他力とハものをいふ也。
文殊普賢の諸菩薩ハ。釈迦の教乃他力によりて自力の発
心あり。今仏者も。慈悲無欲を教へ。其本仏をひらき。

仏たを称ふれバ他力とはいふべきか。今の仏縁ハ他力
ハ常念を亡して。悪念のみ残るべし。かくしきに我執あら
せんバ。仏縁ともなるべしハいふべし。菊然わきすて。善悪と
ふ隔つなし。仏念のいつるかハ生れなから。我道ふとおぼふる
るなり。朱学に入者王学に志す者。儒学をする者
生得の風あり。これをもいふ。縁をもとむべし。えん乃衆
生ともいふべきか。朱学の者ハ朱学に入る者とてハ。及は
を学ぶ者に。あれと云へば。王学の者ハ王学に志せる者
なりてハ好人にあるをもおもへば。左にハ何の生得の
あらん。何の風乃ちからき者と。えんあ給ふとあらんや。三皇
五帝。三王の代々よりハ。けふるまれる縁のとものなし。世の大
変なるよりて。ある質なり。人以ふかくてあり。我慢なる

きの者ハ禅に入情こりし者ハ日蓮宗に入。思慮ある者ハ一向宗
となり。禍福にまよひみだりがはしき者ハ。天台真言となる。
何れをも附乃人の生付。かくさまにわかれをしてわかれたるハ。その
者のひとつのむすぼれこそあれ。我と我との二ツにて。善悪を
宗旨の上にハ。邪正乃辨へなし　僧云　仏法を志して。そこに
儒道の理をいひたくハ。仏縁ともなるべく。仏にもなるまじ
ハあるべし　云甚方ハ佛と我とを一つにして。仏に成べく
いへバ我ハ仏に成らずと。縁をもなしてもなすべからず。
所に云あはす。身を仏ならしめて何かせん。其この身ハ一二
三四五　僧云それハ地水火風の仮合乃ものとおもふべく。
常しおもふなり。甚はなしかうしや。亦まよふ。しかせてしを
へし世の常にて。さしハ本乃形ぞなかるへし。云ふへけれと

不知して。未に済に故に。かりの名あり。然其所れ悪し
きん。しよせん出世の学の業なれど。とか称と申八般若の
なりけり。一二三四に則空。則中なり。仏ハ無乃称なりける
和尚のをいれ死る時よりて所れ。なまく成しなれしそ
本の生るなれ。とはならぬ。わかて神るか。不仁の至。佛祖
と也なんてよく仏となる時ハ異なし。仁愛ある者一旦仏学
に済しく成佛とされとも天性の徳なるひとて異学。
異ある八仏と神に成るべきなり。神もなくも。仁慈ある
徳なれりの八異形し。異なけれ八仏なり。合りし虚実不
睦なりあてなんと何の用より仏になれんや。万物ハ本無より
生じ。形あるものハまたまに帰と。いふを以とし空ハ常住
なり。有ハかりなり。いつね正へ空の名をかり出すによりて。空

乃形よ所付あり。されとも真空の異名はいひ。中道の名
とも。凡夫ハ名利なとに迷ひ。学者ハ色空中にまよ
ぬ。無知の人によるとりをあらく。物をなとをすなりまし

集義外書巻四